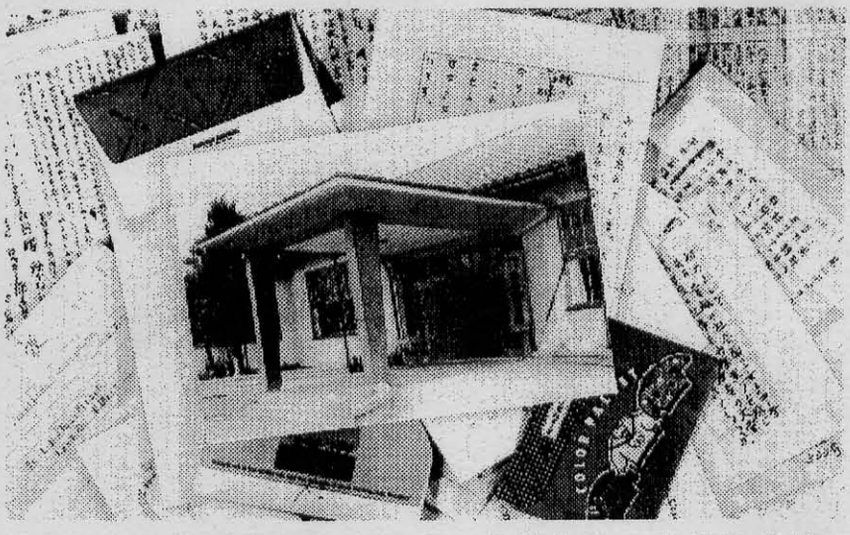
朝日新聞 1985年05月08日 夕刊 11面 4版

聞 （夕刊） 新聞定価 月ぎめ2,600円、1部売り（朝刊）70円（夕刊）40円 第3種郵便物認可

奈々さんだけじゃない

女子中生自殺に切実な反響

学校や教師への不信のことばを残し、長野県松川村で同村立松川中三年生の尾山奈々さん(一五)が自殺していたことがこのほど明らかになり、同世代の若ものや教師、親たちに衝撃を与えている。朝日新聞東京本社の声欄や社会部にはこの連休期間中だけで、三十数通の手紙が寄せられた。奈々さんの死が投げかけた「学校教育と子どもの心のかかわり」という問題について、自分のこととして切実に考えたものが多かった。



奈々さんが通っていた松川中学校（中央、長野県北安曇郡）と読者から寄せられた手紙

私も学校に絶望…

「逃げないで」教師らに訴え

生きぬく強さ期待する声も

「（教師が）持っているものは人をはかるための巨大なものさし……私は学校教育に大いに不満です 脳をダイナマイトでぶっとばしてしまいたいのです 残り少ない思考力で私にできる最も効果的な抗議の方法を考えています」

奈々さんは死の二日前、だれにあてるともなく、こんな手紙を残している。早熟だった少女の心の深層は、今もわからない部分が多い。だが、彼女が教師、学校、社会が持つ「人をはかるための巨大なものさし」に、抗議し続けていたことは確かなようだ。その後判明した手紙全文の中にはこころもあった。

「どんなに古くなっても 人に何を言われようと（教師はものさしを）決して変えません。自分が偉いと思い込んでしまっては人をはかるための巨大なものさし……以前担任の先生へほんの少し、少しだけ私の思いを話したら『それは逃げだ』と言いかえされました。……評価され、それが一生にもかかわるなんて とても悲しい」

教育の場での「評価」といろいろ東京・町田の女子高校生(一六)はきちょうめんな字で「中学のころ 友人達が受験受験と騒ぐのをしり目に 本来の勉強とは何だろうと考えこんだりしませんでした。話しかけ救いを求め、それが拒絶されると、はいあがれないどん底におとされたような気になります」というのは、横浜市港南区の女子大生。

小学三年から高校卒まで十年間いじめられたという、千葉県の専門学校の女生徒(二九)は「この間計六人の教師が担任だったが、とりあってもらえなかった。……教師の皆さん、生徒が自殺しても責任のがれはしないで下さい。生徒から逃げないで下さい」と訴えた。

横浜市旭区で書道を教える女性(会二)は「懸命に自分を分かろうとしてくれる人がこの世にいるというだけでも、自殺をくいとめる大きな歯止めになる」。

「早過ぎた絶望」に疑問を投げかける投書もあった。東京・中野の高校三年の女生徒は「自分の考えを自殺によってでしか表せないというのは、とても惨めなことではないでしょうか。……もちろん今の学校教育のあり方に反対した姿勢は素晴らしいと思います。けれどもどうしてそれを変えていくまで頑張れなかったのでしょうか」。

「中学期は、内面をみつめ大人社会に非難の目をむけ、反抗する時期だと思います。……きびしい言い方をすれば『まあいいや』と思いなおして生きるだけのたくましさ、ずうずうしさがなく、バイタリティーのない育ち方にこそ問題がある」（埼玉県内の三十七歳の主婦）という指摘もあった。

この手紙では「学校だって一つの社会です 教師だって凡人です。……そういう人間の指導をうけて非難したり悪口をいったり友達同士できわいだり、そういう中で一人の人間ができあがっていくのではないでしょうか」とも。

教師からの手紙は少なかった。その中で、長野県の教師は「読書というような実体のない抽象世界で思考し、物（現実）とつき合う具体的な生き方と結びつけられなかった子。不幸といえばそういう生き方を教えてくれる大人が周りにいなかったということではないでしょうか」と述べている。

両親の尾山進さん(四三)、邦子さん(四〇)はこれらの投書に「みなさんが娘の死の意味を真剣に受け止めてくれ、せめてもの救いです。……そういう人間の指導をうけて非難したり悪口をいったり友達同士できわいだり、そういう中で一人の人間ができあがっていくのではないでしょうか」とも。

教師からの手紙は少なかった。その中で、長野県の教師は「読書というような実体のない抽象世界で思考し、物（現実）とつき合う具体的な生き方と結びつけられなかった子。不幸といえばそういう生き方を教えてくれる大人が周りにいなかったということではないでしょうか」と述べている。

両親の尾山進さん(四三)、邦子さん(四〇)はこれらの投書に「みなさんが娘の死の意味を真剣に受け止めてくれ、せめてもの救いです。……そういう人間の指導をうけて非難したり悪口をいったり友達同士できわいだり、そういう中で一人の人間ができあがっていくのではないでしょうか」とも。

飛天ディナーショー
ユニー・フランシス